

テーマ：被災地における地域の居場所の設計の分析と提案

東日本大震災の被災地である宮城県気仙沼市において、今後のコミュニティ再々構築のフェーズを見据えた際の、利用者が使いやすい「地域の居場所」のあり方を明らかにすることである。そのため、宮城県気仙沼市の3つの「地域の居場所」、そして被災地関係なく一般的な知見として熱海や桐生、においてフィールドワークを行った。

「地域の居場所」

近年増加傾向になっているこの地域の居場所とは、地域の中でお年寄りから子供まで、男女関係なく誰もが利用できる場所で、地域で安心して暮らせるようコミュニティを作ろうという目的で作られる場所のことである。場所で行われているのは多種多様で、介護、教育、サークル、ママ会、飲食提供（熱海や桐生、甲府、日立へのフィールドワークで得た知見から）などが行われ、NPO や地域住民で運営されていることが多い。

「みなみまち cadocco」は、商店街の一角に位置し、商店街と青年会によって運営されている。フリースペースでありながら、一方、イベントやサークル活動の場としても利用され、誰にでも開かれた場として利用されている。



「鹿折仮設住宅集会所」は、仮設住宅敷地内に建設され、自治会組織で運営されているが、仮設内にとどまらず、仮設外の人とも接点ができるよう、近隣住民にも開かれた場となっている。

「反松公園仮設住宅」も同じく仮設住宅敷地内に建設され、自治会組織で運営されており、ここは、震災前に住んでいた場所がバラバラな人たちが移り住んでいたという特徴があることから仮設内コミュニティを作ることを中心として利用されている場である。



これらの事例から、本研究では、人の流動性がある場所に位置させることで、利用者の交流が行われる「地域の居場所」になりえることを明らかにすることができた。